

ベルギー

平井信義

「ヨーロッパの都会で、どこが一番印象に残っているか？」と尋ねられたら、私はただちにベルギーのブリージエを挙げる。一年に相当数の日本人がヨーロッパを訪れるであろうが、このブリージエを訪れる人は少ないのではあるまいか。ブラッセルからオーストエンドに行く途中の町で、駅を下りたときの感じは、小さな田舎町にすぎないといった方がよい。

このブリージエほど、私の心をとらえた町はない。なるほど、オーストリア、イタリーの町々、そしてパリには、目を奪うばかりの史蹟が残っていた。シェーンブルン宮殿、サンマルコの広場、パリではノートルダム寺院やサクレキェールの殿堂などが青空に聳えている姿が、今もなお脳裏によみがみつつくる。ところが、ブリージエには、そのようにきわだったものは一つもなかった。

駅の前は、かなり広い広場になっていたが、それは他の都会に見られるように、高層建築でとり囲まれてはいなかった。むしろ、がらんとした感じで、三度目に訪れたときは、駅の前に立ったまま、これでブリージエに来たのだろうか、という虚しさを感じるほどであった。駅の前にはいつも立ち売りのアイスクリーム屋があった。

第一回の訪問のときなどは、それを二つもなめ尽して、愛想のいいおばさんから、「ボン・ヴォアヤージエ（御機嫌よう）」という挨拶で送られた。私は地図を片手にふらりと歩きだしたのであった。

町の周辺にめぐらされている巾広い自転車道を避けて、町の中央へと、目的なく歩いていく道は、くねくねとまがり、これがそのまま中央にいくのだろうかと思われ、それに沿って立っている白い壁は、午前の日をうけて、右に左に輝いていた。多くの家が、二階ないしせいぜい三階であって、三階も低い屋根の下に小窓をのぞかせている程度のものであった。自動車二台は悠に通るほどの道路ではあるが、自動車は一台も通らず、子どもたちが石けりをして遊んだり、戸口に椅子をだして老人が、それにもたれて新聞を読んだりしていた。私の靴音のみが、石畳の上に響きわたっていくような感じがしたが、私を通っても、眼鏡の上から上目使いにチラッと見るだけで、ふたたび新聞に目を落す老人であった。中年の女の人が二人、エプロンをかけたままの姿で立話しをしていた。太った女の人は、大仰に手や指を振っていたが、その声は、私が側を通っても、耳障しい響きはなかった。何かしん閑としている感じであった。

町の方々に水路があった。ベルギーのヴェニスなどと旅行案内に記されていたが、ヴェニスとはまるでちがった趣のある町で、水路があるだけでヴェニスなどと呼ぶのであったら、まったく滑稽な結びつけだと思った。水路の水は美しいとはいえなかったが、ゆるやかな流れがあり、楡の枝の形を映している。その楡の木々の間に細紐を渡して、真白な敷布を乾している女の人もいた。

町の東北にある修道院に着いたのは、すでに昼近くになっていた。小さな橋を渡ると、背の低い石塀がめぐらされている中庭になっていたが、その庭一ぱいに植えられた木々は、太陽の光をほとんど通さないほど葉が繁っていて、庭面には一面に苔がむしていた。修道院の建物がどこにあるのか、きわだった建物がないので、私はうす暗い苔の上を、石塀に沿うようにしてひと廻りした。石塀のところで暗い苔の上を、石塀に沿うようにしてひと廻りした。石塀のところで暗い苔の上を、石塀に沿うようにしてひと廻りした。石塀のところで暗い苔の上を、石塀に沿うようにしてひと廻りした。

閉じられてはいたが、押せば開いたかもしれない。しかし、私は靴の下に踏む苔の感触が楽しくて、ゆっくりとまわり歩いた。これまでのヨーロッパの旅で、これほど私の心をしっかりと捉えるような土地柄がほとんどなかったのは、どういうわけだろうか。たしかに、トランシット(通過旅行者)として、私の心に落着きのないことも原因している。ドイツ人の友人たちと旅行したときには、その饒舌に鑑賞の暇のなかったことも原因となろう。しかし、私の心には、大寺院とか大殿堂とか、それに類似した大きな建物に会うと、それを鑑賞する前に抵抗を感じて、親しめなくなってしまうのであった。どうして、このように目を見はらせるような建物なのだろう。自然を切開き、大空の空間をふさぎ、「我こそは！」と

いうような建物を中心にして町が出来ていた。

ブラッセルの宮殿もそうであった。メッツというフランスの北の町の教会もそうであった。しかも、ブラッセルの宮殿のすぐ目の下には、貧民窟があって、朽ちた壁には卑わいないたずら書きがしてあった。メッツの教会の裏手にも、石がくずれ落ちた建物が窓わくだけをピンクに塗って、いかかわしい家々が立っていた。一体、これとそれとがどういう関係にあるのだろうか。私には、丘に、町に、聳えている大きな建物には、次第に強い抵抗を感じるようになっていた。

このブリージュにはそれがない。十二世紀に立てられたというこの修道院が、しっかりと私の心を迎えてくれたのであった。背の高いくない町並みや、曲りくねった道々が、私にはひじょうに親しいものに感ぜられたのであった。

いま、「子どものことにたずさわっているものが、もし、自分をきわ立たせようとしたら、子どもに気の毒な思いをさせ、不幸に追込むようなことがありますね」——マールブルクの大学で、グロー博士と児童に関する研究について語り合ったとき、私のこのことは、グロー博士が思わず膝を寄せて握手を求めたのを思い出す。「それしかないのです。が、むずかしいことです。それを貫かなければならないのです。」握手は私の掌がぐくだけるばかり強かった。「子どもの幸福のために」ということがよく言われる。「今の世の中で、何が子どものためになっているか」という問題で、ロイナイ博士と半日も話し合ったことも、強くよみがえってくる思出である。「本当に子どもの幸福が何かということ——あるいは人間の幸

福とも言えましようが——を考えるとときに、何が子どもの幸福となっているか。子どもの幸福のためと言いながら子どもに与えているものの中には、子どもを不幸に陥入れているものもあるのではないでしようか——これが私のきり出したことばであった。

「私は、その点で二つのことを考えているのです。」ロイナー博士は目を輝かせた。「一つは、近代文明、すなわち器械文明を中心にした近代文明が、子どもを不幸にしているという点です。器械文明がどのように子どもを不幸に陥入れているか、それを一つ一つ実証していきたくと考えているのですが、その中心は、人間が器械化していつていること。役所・会社その他、世の中の機構は、個人がその個人として生きるよりも、その機構が上手に運営されるような個人を要求しているでしょう。そうした人間を作るように、子どもの教育も要求されるのは必然でしょう。」

「家庭生活の器械化も、人間関係を壊してきていますね。人間関係、ことに親子関係などは、授乳をしたり、おしめをとりかえたり、生活からみればばかばかしいことを通じて育っていくものであるのに、家庭も器械化して、恐らく、将来は『育児の道具』などが出来るのではないでしようか？」と私。

「アメリカ人の生活がそれをよく表現していますね。しかも、それを人々が疑わなくなってしまうている。それが恐ろしいことです。」  
「アメリカ人のようになってはたいへんだ、と私の友だちのドイツ人が言うのをしばしば耳にしましたよ。」

「そうなのです。私もドイツ人で、子どもの問題にたずさわっているものは、そのことをひじょうに心配しているのです。しかし、

大勢には、なかなか抗しがたい。どの家庭でも、生活を器械化しようとしている。欲しいものは、電気冷蔵庫、電気洗濯器、それが、手に入ると自動車です。テレビです。しかし、器械文明の誘惑は、際限なく続いていくことでしょう。その間に、失われていくものはないでしようか。」

「私は、ヨーロッパの旅を、町の中ではほとんど歩いて過しました。それによって、味わうことが出来ました。しかし、あなた方ドイツ人の旅行は、お気に障るかも知れませんが、自動車やオートバイで飛ばしていつて、名所を見て帰ってくる。ただ「見て」帰ってくるだけのような感じがするのです。」

「本当に生活を味わうということではなくって、器械の上に乗せられて生活することが、多くなりました。子どもたちも、そうした親たちの生活を、ただまねていつています。素朴な楽しみを持つことがない——これが私の言いたい第二の点です。今の子どもは、ほんやりする時を失いつつある。いつも、何か外部からの刺激を受けていなければ、それが生活でないように思ってしまった。親や教師も、子どもに何か新しいものを与えることが、子どもを幸福にすることだと思ひ、素朴な楽しみを与えることを忘れかけています。」

ロイナー博士との話の要点は、「時間」とか、「空間」の問題になって、抽象的な論議になってしまったけれど、私にはいつまでも忘れ得ない心のしこりとなっている。  
ブリージェの修道院の石のベンチに腰をおろして、私は一時間半も静寂を楽しむことが出来た。この静寂は、私のヨーロッパ滞在中で、最も楽しい思出となったのである。